# いわき市


1

Ⅰ 地形・歴史

1 地形等 2

2 歴史 3

22

Ⅱ 統計

人口・産業等

1 人口密度 22

2 人口の推移 23

3 年齢別人口 24

4 労働力人口 25

5 産業別人口 26

6 農業 27

7 工業 28

8 商業 29

9 漁業 30

10 観光 31

その他

土地利用 32

道路 32

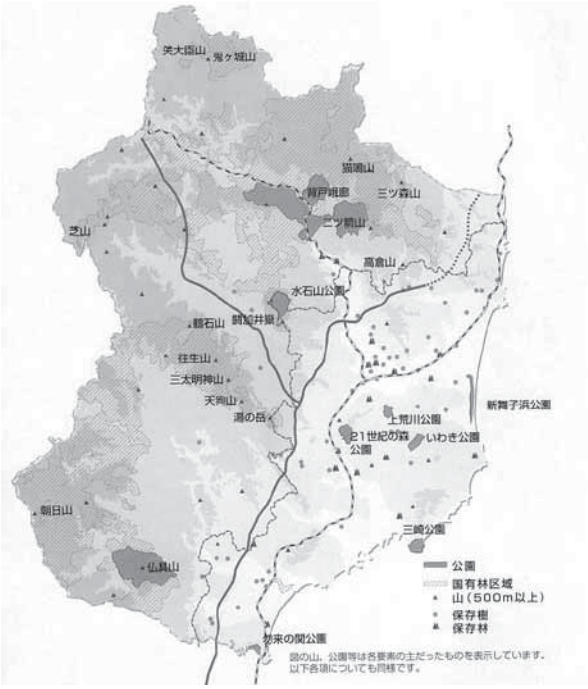
# Ⅰ地形・歴史 Topography & History

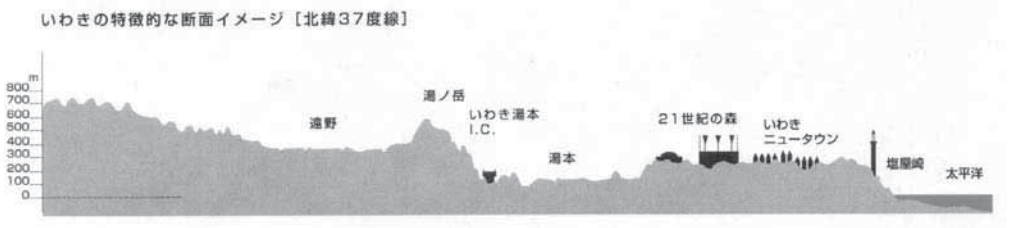
## 1 地形等

市内の地形は、西方の阿武隈高地(標高 500～700 m)から樹枝状に伸びて一部は海岸線に達する丘陵地、海岸線や河川に沿った地帯に断続的に見られる段丘、さらに扇状地、海岸平野、谷底平野、砂州などを含む低地に分けられる。阿武隈高地から市域を貫流し、太平洋に至る夏井川、鮫川などの河川は、川床勾配が大きく急流を作っている。とりわけ東縁部では隆起量が大きいために、四時川渓谷、夏井川渓谷、鮫川渓谷などと呼ばれる深い谷を形成している。

気象は、平年値で、年間平均気温が 13.4℃(最高気温 37.7℃(平成 6 年 8 月 3 日)、最低気温 -10.7℃(昭和 27 年 2 月 5 日)、年間降水量 1,408.9 ㎜、年間日照時間 2,042.5 時間であり、温暖で過ごしやすい気候と言われている。[平成 23 年度：年間平均気温 13.6℃(最高気温 33.5℃(8 月 12 日)、最低気温-4.5℃(1 月 31 日)、年間降水量 1,415.0㎜、年間日照時間 2,032.6 時間(小名浜特別地域気象観測所)] (気象庁「気象統計情報」)

植生の特徴は、海抜 600ｍを越える冷温帯にはブナ林を中心とする夏緑林（落葉広葉樹林)、300～600ｍの中間温帯にはイヌブナ、モミなど、300ｍ以下の地帯にはアカガシ、スダジイなどの照葉樹林（常緑広葉樹林）が生息している。




「いわき市景観形成基本計画（平成 13 年 4 月)」より

## 2 歴史

### (1) 旧石器時代～古墳時代

**旧石器時代(紀元前 3 万年～紀元前 1 万年)**

日本の旧石器時代は、約 3 万年前を境に、中期・後期に分別されている。

いわき市内に発見されている旧石器時代の遺跡の殆んどは、約 3 万年前から 1 万 2,000 年前までの後期旧石器時代に属する。この時代は最後の氷河期にあたり、今より気温が 6～7 度低く、東北地方から中部地方には亜寒帯の針葉樹林が広がっていた。人々は石を加工した道具を用い、ナウマン象やヘラジカ、オオツノジカなどを狩猟対象としたキャンプ生活を行っていた。

大畑 L 地区と亀ヶ崎遺跡の石器

市内には、**大畑遺跡**（泉町下川)、**輪山遺跡**（岩間町)、**横山遺跡**（平上平窪）等、20 ヶ所をこえる遺跡が発掘され、ナイフ型石器（切る道具)、掻器（掻く道具)、彫器（彫る道具)、尖頭器（突く道具)、ハンマーストーン（割る道具）などが数多く出土している。

**縄文時代(紀元前 1 万年～紀元前 300 年)**

今から 1 万年前になると気候の温暖化にともなって氷河が溶け、海水面が上昇、大陸から日本列島が独立する。動物相も、象やオオツノジカ等の大型動物に代わり、イノシシ、シカ、テン、ウサギ、カワウソ、キツネ等の中小動物が増えた。

また、落葉広葉樹が繁茂するようになり、クリ、クルミ、シイ、カシ、トチなどの木の実やイモ類等の資源も豊かになった。こうした環境の変化に伴ない、人々は竪穴式住居による集落を作り、狩猟・採集・漁労を中心とした生活を行っていたと推測される。漁労はアサリ・アワビ・サザエ・マダイ・スズキ等を獲る沿岸漁とカツオ・マグロ・サメ・イルカ等を獲る外洋漁で、漁法は尖頭具による刺突漁、釣り漁、網漁が行われた。

寺脇貝塚の骨角器(縄文晩期)

発掘された当時の貝塚からは、鹿角製U字形釣針、結合式釣針、粗製尖頭具(刺突漁法)、土錐(網漁法)などの骨角器が出土している。

また、土器に施された文様の類似性やいわき地方に見られない材質の石鏃(せきぞく)※が発掘されるなど、当時の人たちが、関東、中部、東北地方と広範な交流をしていた様子が窺える。

※石鏃：石のやじり。木や竹の柄に付けて狩猟具、武器として使用。

【縄文時代の遺跡】（*BC:紀元前）
○集落等遺跡
草創期(BC10000 年)：竹之内(＝三和町下市萱)、龍門寺(＝平下荒川)
早期(BC7000 年)：西ノ作(＝内郷小島町)、大畑G(＝泉町下川)
前期(BC4500 年)：弘源寺(＝平鎌田)
中期(BC3000 年)：大畑、下大越(＝平下大越)、郡(＝勿来町窪田)
後期(BC2000 年)：綱取(＝小名浜下神白)、西郷(＝常磐西郷町)、冷水(＝遠野町上根本)
晩期(BC1000 年)：寺脇(＝小名浜)、山下谷(＝川前町川前)
○貝塚遺跡
夏井川流域：薄磯(＝平薄磯)、下大越、片寄(＝平下片寄)、下山口(＝平下山口)、弘源寺(＝平鎌田)など
藤原川流域：大畑、綱取、寺脇、御代(＝鹿島町御代)、西郷など
鮫川流域：郡、四沢(＝勿来町)など

**ダイダラボー**

小名浜湾の西に位置する大畑貝塚（泉町下川）には、縄文時代の中期から後期にかけて捨てられた貝殻が３メートルもの厚さで積もっていた。

これほど多くの貝殻を捨てたのは、物凄く大きな人間だったに違いないと、昔の人たちは考えたようで、「昔むかし、ここにダイダラボーという大きな男がいて、毎日、湯の岳にすわり、手を伸ばして照島近辺から貝を採り、食べていた。その貝殻を捨てたものが積もりに積もって塚となった」という伝説が大畑貝塚の周辺でも語り伝えられている。

## 弥生時代(紀元前 200 年～紀元 300 年)

紀元前３世紀ごろ、水稲農耕を主とする新しい文化が、鉄・青銅の金属器や紡織を伴って日本に伝来した。水稲農耕は共同作業による水利・灌漑を必要とし、大規模な集落も形成され、集団をまとめるリーダーも出現した。人々は、生活の舞台を台地から低平地の竪穴住居に移し、米を主食とする生活を開始する。

番匠地遺跡の水田跡(中期)

【弥生時代の遺跡】（*BC:紀元前）
○遺跡
前期(BC200 年)：作Ｂ(＝三和町下市萱)
中期(紀元前後)：龍門寺(＝平下荒川)、番匠地（＝内郷御厩町)、戸田条里(＝四倉町戸田)
後期(AD200 年～)：伊勢林前(＝勿来町四沢)、輪山(＝岩間町)、八幡台(＝植田町)、朝日長者・夕日長者(＝泉町下川)
○遺物
土器：弥生式土器(壺・甕・深鉢・台付き鉢等)
漁具：鹿角製結合式釣針、尖頭具、回転銛、有孔尖頭具
工具その他：石斧、石錐、石鏃、調理用具、装身具、土製紡錐車(糸に撚りをかける布織道具)

### 弥生人と縄文人

のっぺりとした長い顔、小さめの耳たぶ、一重まぶた、薄い眉毛というのが弥生人の特徴だったといわれている。それに対し縄文人は毛深くて、眉毛が濃く、大きめの耳たぶ、厚めの唇、広い鼻、毛抜き式咬合の歯、そして、平均身長は男 158 センチメートル、女 148 センチメートル。

また、当時の日本の人口は、縄文時代中期で約 26 万人、弥生時代には約 60 万人と推測されている。

## 古墳時代（紀元 300 年～紀元 600 年）

弥生時代に出現したクニが連携を深め、統一国家を形成する時期。死者を葬るため土を高く盛り上げた古墳や斜面を穿った横穴が造られた。墳丘の周りには埴輪が配置され、墓の内部には土師器、須恵器、武具、馬具、装身具等の副葬品が収められた。

菊多の柵が設置されたのは、835 年（承和 2 年）太政官符に「剗（せき）を置いて以来今に四百余歳なり」との表記があることから、5 世紀中葉であり、当時の大和政権の陸奥蝦夷に対する防衛拠点であったと推定される。

神谷作古墳群出土の埴輪

【古墳・横穴】（*AD:紀元）

○古墳

前期（AD300 年～）：愛谷（＝好間町愛谷）

中期（AD400 年～）：玉山 1 号（＝四倉町玉山）、久保ノ作（＝平下高久）

後期（AD500 年～）：神谷作 106 号、101 号（＝平神谷作）、竹ノ下（＝平南白土）、横山古墳群（＝平上平窪）

○横穴

鮫川流域　：関田（＝勿来町）、館山（＝植田町）、館崎（＝植田町）

藤原川流域：大畑（＝泉町下川）、中畑（＝常磐下船尾町）、ホウノ木作（＝常磐関船町）、九反田（＝鹿島町御代）

滑津川流域：中田（＝平沼ノ内）、八幡（＝下高久）、白穴横穴群（＝平神谷作）

### 中田横穴の三角紋

平沼ノ内には、国指定の史跡「中田横穴」がある。玄室と呼ばれる一番奥の部屋には、白と赤で色づけされた三角の模様が描かれ、また、金銅製の馬鈴など多くの副葬品を出土し、全国でも指折りの価値を持つ装飾古墳とされている。

ところで、実はこの横穴の模様は未完成のままなのだ。一部、色づけがされていないところがある。色づけ作業はどうして途中で終わってしまったのだろうか。大きな事件が起きたのだろうか。それとも、完成させないこと自体に何かの意味があったのだろうか。

中田横穴の壁画